

関係各位

山口市長 伊藤 和貴

第 3 0 回 中 原 中 也 賞 の 発 表

受賞詩集	生きているものはいつも赤い					
著者名	高村 而葉					
出版社	思潮社	刊行年月日	2024年10月25日			
著者の住所 京都府		出身地 大阪府大阪市				
年齢	47歳	生年月日	昭和52（1977）年8月19日			
性別	男	職業	自営業	最終学歴	高校中退	
《コメント》 この詩集が世に出るまで、ただただ穴を掘り続けているような状態だったので、知らせを受けていま、地上に間違っって頭を出したモグラの気分です。 20年前、生きている詩人に会うという目的のために、ほとんど詩のことを知らないまま、詩（のようなもの）を書き始めました。あの時の小さな決断が、長い歳月を経て、このような結果に至ったのだなど、静かに驚いています。 言葉で説明できないことそのものを、言葉によって密閉して渡すことができる詩は、人間と人間をどこか深い部分で親密にする力があるはずです。 これからも、対話の可能性としての詩を書き続けていきます。						
《選考経過》 公募、推薦の詩集247点について本年1月に開催された推薦会での検討の結果、高嶋樹壺『一千暦の帰^{たかし まき い}り道^{いつせんこよみ}』、高塚^{たかつか}しい^{ろくがつ}『六月の幻想^{げんそう}』、高村^{たかむら}而葉^{じょう}『生きているものはいつも赤い^{あか}』、のもしゅうへい^{のもしゅうへい}『通知セン^{つうち}ター』、南^{みな}桧^み桧^{みくう}『ソノヒトカヘラズ』、湯^ゆ村^{むら}りす^{ずー}『ZOO』の6冊が選ばれ、本日の選考会の対象とされた。 南桧桧『ソノヒトカヘラズ』は大切な記憶や引用詩への思いなど、作者の人生や人生観が詰まった、優しさの感じられる一冊として注目された。湯村りす『ZOO』のユニークさ、高塚しい『六月の幻想』の勢いや激しさは今後に期待されるところを持っている。高嶋樹壺『一千暦の帰^{たかし まき い}り道^{いつせんこよみ}』は「供え火拾い」「てっちゃん」など、ストーリー的でありながら詩へ向かおうとする作品から成る。過去や時間の扱い方は謎を残すが、そこから生じる魅力は評価された。 最終的な議論の対象となった作品は高村而葉『生きているものはいつも赤い』、のもしゅうへい『通知センター』だった。のもしゅうへい『生きているものはいつも赤い』、のもしゅうへい『通知センター』などにはネット社会への違和感や抵抗感が見て取れる。軽みをもそなえ、現在を切り取る詩集として高く評価された。高村詩集は、掘んだ地点や身動きできないその場所に錨をおろすようにして言葉を刻む。言葉をめぐるためらいや、どこでどう生きるのかといった疑念や自問が滲む。生きるうえでぶつかる壁や困難から目をそむけず、時間をかけて編まれたと思われるこの一冊には稀なる完成度の高さがある。 最後まで白熱した討議の結果、高村而葉『生きているものはいつも赤い』を第30回中原中也賞にふさわしい詩集として委員全員一致で選出した。						
選考委員：カニエ・ナハ、川上未映子 ^{かわかみ み え こ} 、野崎有以 ^{のざき あい} 、蜂飼耳 ^{はちかいみみ} 、穂村 弘 ^{ほむらひろし} （50音順・敬称略）						

《山口市長コメント》

第30回中原中也賞が、高村而葉さんの詩集『生きているものはいつも赤い』に決定しましたことを、心からお祝い申し上げます。

第30回の節目となる賞を受賞された高村而葉さんには、この度の受賞を契機に尚一層、活躍の場を広げられ、更に大きく飛躍をされますことを心から御期待申し上げます。今後とも多くの方が、日本の近代詩史に偉大な足跡を残した本市出身の中原中也の業績を顕彰するこの賞をひとつの目標として創作活動に励んでいただければ幸いです。

令和7年2月15日 山口市長 伊藤 和 貴

※受賞者の年齢は、R7.2.15 現在